国語史（近代）

福島邦道

一

「近代」を標榜していても、研究の方法や内容がまったく違っている。幕末から明治に至る「近代日本語の研究」（国語と国文学、42・4特輯）は、翻訳語や文表現を取り扱った論文が目立つ。杉本つとむ氏『近代日本語』（紀伊国屋新書、42・2）は、中世以降で、「歴史的所産としての言語」という副題が示すように、言語社会史あるいは言語文化史的色彩が濃い。同じ著者による大著『近代日本語の新研究』（桜楓社、42・9）は、江戸時代における蘭語研究が中核をなしている。尾崎知光氏『近代文章の黎明』（桜楓社、42・5）は、二葉亭の浮雲についてで、これは明治である。国語史家ではないが、春山行夫氏「近代用語の系統」（言語生活連載）は、訳語の源流を中世末にまで求めている。実際、展望を執筆する段になってどこまでを近代に入れたらよいか迷うようなものが多くてきて、結局いつもながらの総花式に陥ってしまったのである。

二

キリシタン関係から始める。海彼では、八十数歳の高齢をもって今日もなお研究をつづけられているシュールハンマー師の『著作集』G. Schurhammer: Gesammelte Studien. 全五冊（一九六二～六五、ローマ刊）が完結した。師は、聖フランシスコ・シャヴィエル研究の世界最高をゆく学者で、その余勢で東方のキリシタンの諸問題を研究し、有名な「ロドリゲス伝」なども含まれている。「十六、七世紀における日本耶蘇会の教会言語問題」が収載されていないのは、期待していただけに、非常に残念だった。Varia に書評が一冊あてられ、キリシタン研究の世界の名著がとりあげられている。土井忠生氏の『ロドリゲス日本大文典』について、langjähriger Forschung として、くわしい紹介がなされているが、土井氏こそまさに日本を代表する世界的な国語学者なのである。ちなみに『大文典』の三訂版（42・11）には、私事にわたるが、私の出典研究の成果も取り入れられている。ロドリゲスの『日本教会史 上』（岩波書店・42・10）については他日くわしく紹介したいと思っている。

キリシタン関係の論文は相変らず多いが、私の印象に残る論文は少ない。柴田武氏「『日葡辞書』の九州方言」（本邦辞書史論叢、42

2）は、シモという注記がなくても九州方言があることを立証したもので、今までのように日葡辞書に追随するというのではない。疑問もある。ニンヂャクは「柔弱」ではなく「任著」とすべきで、文証もあり、九州方言かどうか疑わしいのである。しかし、斬新な言語学的方法には多くの学ぶべきものがある。亀井孝「コリアドの辞書に方言ありや」（国語学、42・6）は、外国語を手がかりに日本語の俗語形を探しだしたものである。この論文には、大塚光信氏による「コリャード羅西日辞典」（臨川書店、41・11）の書評の気持も含まれている。索引には、「袋」の fucuro と「梟」の fucuro が同一項目に収められてあるが、亀井氏から口頭で「こういう誤りは亀井がやっても福島がやっても犯すものだ」と言われたが、私は気づかなかった。外国語に通じないキリシタン語学者の通行する現状に対して、頂門の一針と受けとるべき論文である。なお、コリャードの三部作は、日本のグリム、大塚兄弟によって公刊され、Propaganda Press に容易に接し得られるようになったのである。

キリシタンの辞書では、ほかに、「ラホ日辞書の日本語」が金沢大学から出はじめ、相坂一成氏「翻字覚え書(一)―ラホ日辞典の日本語―」（金沢大国語国文学、42・3）がある。日葡辞書には、森田武氏「日葡辞書の成立に関する一考察」（本邦辞書史論叢）、今泉忠義氏「日葡辞書おぼえがき、その二、その三、その四」（国語研究41・5、42・1、12）がある。

サントスの御作業には、林田明氏「写本『サントスの御作業』」（国語国文学試論、一三）があり、平家物語には、風間力三氏「天草版平家物語に見える異例の語形」（甲南大文学会論集、42・2）、安達隆一氏「天草版平家物語の口訳態度について――特に感動詞を通してみた――」（国語国文学報、41・12）、中村雅子氏「係り『こそ』の呼応意識――天草版ローマ字本を中心として――」（国文目白、42・2）、麻生朝道氏「天草本平家物語巻四の十六から二十までの底本について」（佐賀大文学論集、42・8）、佐々木峻氏「天草版平家物語の尊敬表現法――被待遇者の群落と表現法との対応関係について――」（国文学攷、42・11）、阿部節子氏「天草版平家物語における待遇表現」（国文、41・7）がある。伊曽保物語には、鶴井清美・中川美里氏「天草本伊曽保物語の『』について」（女子大国文42・7）、柏谷嘉弘氏「天草本伊曽保物語の漢語」（山口大研究論集42・3）があり、懺悔録には、中出惇氏「コリャード懺悔録における助動詞『ウ』と『ウズ』について」（愛知大国文学、42・10）があり、写本類には、鎌田広夫氏「江戸期キリシタン文献資料の語法」（国語研究、42・1）があり、人物には、林田明氏「初期吉利支丹時代に於けるイルマン・ロレンソの研究」（千葉大研究報告、41・3、42・3）があり、出版には、新井トシ氏「きりしたん版の出版とその周辺（六）」（ビブリア、41・10）がある。紙幅の関係で一々紹介しないが、私はキリシタン資料のマニアなのでいろいろと集めている。ただ、『校本どちりなきりしたん』（福井国語学グループ、41・1）、『天草本ヘイケモノガタリ検案』（桜楓社、42・5、11）のように資料の提供だけに終っているものは、もひとつ物足りないのである。亀井高孝・阪田雪子両氏の『ハビヤン抄キリシタン版平家物語』（吉川弘文館、四一・一〇）は前著を一新した学術書である。

シナ資料関係は少ない。亀井孝氏「長夜十眠――歳旦にちなみて――」（日本歴史、41・2）は廻文歌であり、田中健夫氏に『日本

寄語の研究』（京大刊）の紹介（日本歴史、41・3）があり、史学畑ではこういう資料に敏感である。ほかに、福島「日本一鑑所引の古辞書」（本邦辞書史論叢）がある。

抄物は稀覯に属するので扱える人が少ない。まず、鈴木博氏「四河入海について――東福寺所蔵本と両足院所蔵本との比較小見――」（国語国文、41・5）があげられる。抄物中もっとも浩瀚なもの、版本全百冊何万行あるであろうか。よくその写本を比較してことばの特色を探ったものであるが、オ段長音の開合のちがいを数ページに圧縮するための調査の労苦が紙背ににじみでていて、深い感銘を受ける。大塚光信氏「抄物とその助動詞三つ」（同上）は、綿密な調査の結果、いかにも抄物らしい「シマウ」などを取り上げている。土井洋一氏「抄物の転写本と版本」（学習院大文学部研究年報、41）は、「ダ」のある四部録抄を五種八版に分けてことばをさぐるなど、今まで考えもされないことだった。ことばの相違の見分け方については控え目であるが、もう一歩進めると一学風を形成し得よう。谷沢尚一氏「三体詩抄の説心」（東洋文化、41・9）は、素隠の素性を明らかにしており、福島「抄物語彙ノート」（言語と文芸、42・3）もある。史記抄には、寿岳章子氏「史記抄の文章」（国語国文、41・5）があり、史記抄研究会の「史記桃源抄高祖本紀注解(一)」（立命館文学、41・3）は、国語学国文学を専攻する者と史籍としての史記の研究を志す者との共同研究であるが、まだ始まったばかりである。なお、国語学者と史学者との共同といえば、前年度とりあげられるべきだったが、佐藤進一・池内義資・百瀬今朝雄三氏の「中世法制資料集 第三巻 武家家法1」（岩波書店、40・8）がある。山田忠雄氏などによって五〇ページにわたる精細な補注が施されており、共同研究の実績をあげている。

狂言では、蜂谷清人氏「天理図書館蔵『狂言六義』における敬語の考察――動詞・助動詞の意味および用法を中心に――」（共立女子学園創立八十周年記念論集、笑いについて、41・10）がある。手際よく敬譲の用法がまとめられ、問題点も抽出されている。天理本の語学的紹介としてははじめてであるが、特殊な論集のため大方の目にふれ得ないことが惜しまれる。蜂谷氏には「『おりゃらします』考」（国語学、41・3）もある。柳田征司氏「大蔵流狂言に見える、お礼のことば『有難い』と『忝い』について」（国語学、41・12）は、名著「毎日の言葉」を実証し、補正したもので、片々たることばだが影響するところが大きい。民族によっては「ありがたい」ということばのないものもある（服部四郎『蒙古とその言語』参照）。語誌研究のおもしろさは尽きるところがない。佐竹昭広氏「下剋上の文学」（筑摩書房、42・9）は、狂言や御伽草子などの文学を扱ったものだが、展開されている語誌考証は私などの到底及ぶところではない。佐竹氏の料理を味わうと、その庖厨がかいま見たくなる。

中世文語の研究はふるわない。山口明穂氏「『已然形――や』の形について――中世における一用法をめぐり――」（愛知教育大国語国文学報、41・12）があるにすぎず、宗祇の分葉の「めや」「なれや」についてよくしらべあげてある。山口氏には「『かごと』について」（国語研究室、41・12）もある。

中世口語では、山内洋一郎氏「否定の『ばや』について――菟玖波集の『むめ水とてもすくもあらばや』に寄せて――」（連歌とその周辺、42・12）がある。否定の「ばや」の存在を確認されたもの

だが、これだけの用例を拾いあげるためには、膨大な文献の読み捨てがあったわけで、小品とはいえ、大論文に匹敵する。ほかに、小林賢次氏「条件表現形式としての『なら』『たら』の由来」（言語と文芸、42・9）や長瀬富子氏「室町時代の疑問表現――助詞を中心として――」（同上）がある。

特殊なものでは、金田一春彦氏「邦楽の楽譜――特に楽器・歌唱の譜について――」（フィルハーモニー、42・9、10）がある。平曲、謡曲、朗詠、声明などを五線譜入りで説き、旋律の由来などを明らかにした、例の名人芸的論文で、「四座講式」につづくものとして、これらの大成が期待される。

三

近世以降の外国資料は豊富で、朝鮮、ロシア、オランダ、イギリス、アメリカなどである。キリシタン資料のメッカが広島なら、朝鮮資料のメッカは京都である。浜田敦氏は全朝鮮資料の公刊を終わり、自ら「指示詞――朝鮮資料を手がかりに――」（国語国文、41・5）および「副助詞など」（同、42・1）によって資料の続み方の範を示された。これらの論文は、酷似する日韓両言語を対比し、文法の微妙な相違をとらえるという対照文法を確立したものである。日本語の副助詞が朝鮮語の補助詞に対応し、両助詞には名詞的性格のあることや「ばかり」「だけ」が朝鮮語の man にあたることなど助詞とは何ぞやを考える恰好な手がかりを与えてくれる。崔鉉培氏や李崇寧氏などの論著を引きあいにだすあたりは、日韓の碩学の国際会議のようである。安田章氏には「苗代川の朝鮮語写本類について――朝鮮資料との関連を中心に――」（朝鮮学報、41・4）、「対訳」（国語国文、41・5）、「仮名資料序」（論究日本文学、42・1）「類解攷」（立命館文学、42・6）がある。鹿児島県苗代川は新村出氏が往年朝鮮資料を探訪された故地で、そこを再訪して新資料を得たのである。対訳は外国資料の特徴の一つであるが、朝鮮資料による対訳は、よほど朝鮮語に熟達していないとできないわけで、日仏辞書による対訳などとは次元がちがう。「気の毒」は近世語の意味論上興味あることばであり、今までは文脈によって意味をとらえていたのに対して、朝鮮語の対訳によって明確にとらえ得たのである。類解は、倭語類解の位置を他の類解との対比において見出そうとするものである。ほかに、大友信一氏「朝鮮資料による国語仮名表記と諺文音注表記対照」（国語学研究、41・10）がある。

ロシア資料では、吉町義雄氏「露都創刊欽定万国寄語の日本語――二百年前の奥九方言――」（九州大文学部「創立四十周年記念論文集」、41・1）がある。この資料についてはさきに村山七郎氏『漂流民の言語』に、パラス編「欽定全世界言語比較辞典」として紹介ずみのものであるが、このたびは写真複製なので信憑性が高い。奥九方言とは、奥州方言と九州方言であり、両系統の漂流民のことばを採録したからである。吉町氏の研究の方が早かったことは村山氏も認められたが、村山氏は第五番目の日葡辞書の発見という大功績をあげた。パラスの辞典は東西のロシア語の大家によって国語史家の利用にたえるようになったのである。

吉町氏は九州大学を定年退職されるにあたり、「論著目録」（文学研究、41・3）を発表されたが、外国資料のオリジナルな紹介として、今後とも斯道同学の士のよき道標となることであろう。オランダ関係では、三沢光博氏「ホフマンの日本語敬語説に就いて」（日

本大文理学部研究年報、41・12）がある。ホフマンの日本語文典、日蘭辞典、日本文法例証から敬語説を抽出したものである。ホフマンの文典の英文本は東洋文庫から複製されるが、三沢氏は英文本蘭文本独文本をくらべながら訳し終り、近く訳本を上梓する予定と仄聞している。英米関係では、サトーの会話篇は解説なしなので措くとして、ヘボンの和英語林集成の解説は松村明・飛田良文両氏の手になるもので、諸本の踏査によって蘊蓄を傾けられた飛田氏は、「東京語の連母音『オ・ウ』の成立――和英語林集成を中心として――」（国語と国文学、42・4）において、他の外国資料や方言を採用して、ヘボンの辞書の深い読みを示している。

以上は欧米人の日本語研究であるが、逆に日本人が外国語を学んだものも、広い意味での外国資料と言える。基礎的なものに、古賀十二郎氏の遺著『長崎洋学史』（長崎文献社、41、42）がある。上下二冊の大冊で、われわれには上巻が関係する。長崎関係の研究が困難な問題に逢着すると、必ず古賀氏が生きておられたらという声を聞くが、古賀氏の著に接すると、当今の学者が小さく見えてくるのである。「京都市立西京商業高等学校所蔵洋学関係資料解題1」（孔版、42・3）は、大学そこのけの蔵書で、鈴木博氏の解題が光を添えている。

近世において日本人が積極的に学んだ外国語はもちろんオランダ語である。片桐一男氏「阿蘭陀通詞・蘭学者の使用せる単語帳」（国語と国文学、42・4）があり、杉本氏の『近代日本語の新研究』には、蘭語研究上の諸業績について克明な考察がなされている。ただ、大槻玄幹の西音発微について、「国語学史上の一発見」と題して、橋本進吉氏「国語仮名遣研究史上の一発見」にあやかっているが、西音発微は今から二十数年前の東大講義、橋本進吉氏『国語音韻史』（岩波書店、41・1）（三五一ページ）に適切に利用されており、古書展にもよくでるし、そんなに珍しい本ではない。橋本左内の蘭語学習については、杉本氏の「橋本左内についての覚え書き――その蘭語学習の方法と訳文について――」につづき、佐藤喜代治氏「橋本左内の書簡に見える漢語について」（国語と国文学、42・4）がある。佐藤氏には高野長英の蘭語学習についての「『三兵答古知幾』の漢語」（国語学研究、42・8）もある。オランダ語の答古知幾（タクチキ）は兵学である。佐藤氏の研究方法は、訳語に用いられた漢語に、典拠あるものと新造語とを調査することであるが、これは、氏の文章史の研究においては語彙が重要な要素をなしており近代文章史を企図しているようにうかがえるのである。

英学関係では、最初の英和辞書について、渡辺実氏「『諳厄利亜語林大成』編訳次第」（本邦辞書史論叢）がある。例の『日本英学資料解題』の執筆者であるだけに、よく資料を見て立論している。森岡健二氏「現代漢語の成立とその形態」（国語と国文学、42・4）はこのような初期の英和辞書など数種を駆使して、漢語（訳語）の淵源と構造をさぐったもので、名著『国語の中に於ける漢語の研究』の現代版を目ざしているように思われる。ところで、森岡氏の衣鉢をうけつぐ東京女子大学の若い研究グループの活躍は目覚ましい。御法川恵子氏「聖書和訳とその訳語についての国語学的研究」（日本文学、40・11）は、ヨハネ伝の訳語である。栗島紀子氏「訳語の研究――西周を中心に――」（日本文学、41・10）は啓蒙思想家西周の用いた訳語である。田島尚子氏「文明開化期における訳語の研究――英和対訳袖珍辞書を中心として――」（日本文学、42・

3）は、最初の活版本英和辞書の訳語である。森岡氏は一方、初期の英和辞書に、ロブシャイドの英華辞典がどのように影響したかについての研究を続行し、森岡・伊藤みる子両氏の訳語形成期におけるロブシャイド英華辞典の影響Ⅱ」（東京女子大比較文化研究所紀要、41・7）は、一般の翻訳文への影響具合を細密に調査し、訳語すなわち中国語が日本語に取り入れられるに至る経過がよく描かれている。こういう研究方法は、森林泉子氏「借用中国語についての一考察――近代日本語形成の一要素として見た――」（日本文学、42・3）にもうけつがれ、これは英和字彙への影響である。訳語の全体的研究に対して個別的研究は少なく、古くは広田栄太郎氏のものなどがあったが、宮地敦子氏の精考「『愛す』考」（国語国文、41・5）によってその渇をいやしてもらえる。国語史学の考証にはこういう広さが必要である。

訳語が語法形式にまで関係したといわれるものに「である」の発生をめぐる論争がある。ポレミックではあったが、この二年間の展望中、もっとも実りある成果をあげている。「である」の研究史は、近代語研究の中では古いものに属するが、再燃したのは近代語学会の口題発表あたりからで、モノグラフィーとして活字になったのはもすこし遅れる。杉本つとむ氏「近代語の標章――デアル体の発生と展開――」（国文学研究、37・10）、同氏「漢籍国字解とその文体――デアル体の一側面」（武蔵野女子学院短大紀要、38・2）〔以上『近代日本語の新研究』所収〕、中村通夫氏「『である』小考」（中央大文学部紀要、38・3）、同氏「である再考」（中央大文学部紀要、42・3）、古田東朔氏「幕末明治初期の翻訳文等における『X＋ある』」（国語と国文学、42・4）とつづいたのである。本当は昭和三七年あたりから説きおこさないと、問題の焦点がつかめない畏れがあるが、便宜昭和四二年についてのべることとする。中村氏の再考は、小考以後の諸家の見解に対して、再度、新資料を提出して補強したもので、小考・再考で一〇〇ページ近い論文である。中村説を要約すれば、中世のデアルは近世に亡んだのではなく、近世を通じて教養層――漢学者の講釈・講談、国学者の口語訳、僧侶の説教など――に用いられており、蘭学をまって近世に新たに発生したものでもなければ、オランダ語 zijn の直訳のために創始されたものでもないというのである。古田説は、多角的に展開されている。九州関係の諸書に見えるデアルが、九州方言に支えられて現われていること、対話におけるデアルが上位者から下位者に用いられていること、明治以後デアルが文末表現に用いられるに至った事情などがやはり豊富な資料で論ぜられている。もとより私にはこの近代語の二権威に対して論評する資格はない。拙見をさしはさませていただくと、漢学の講釈・講談――とくに弁書におけるデアルは、荒川正一氏「近世江戸語の語法抄」（昭和一一）において唐詩選国字解などのデアルを指摘したのが最初である。漢学者のデアルでは、古市興孝の経書字弁（元禄十一年）がもっとも古く、中村説のようにこの系統が主流をなしていたと思われる。九州方言も考慮すべきことは、蘭学英学ばかりでなく、朝鮮でも、交隣須知やその増補本にも多くのデアルがあり、後者は対馬人の著である（言語と文芸、43・3拙稿参照）。古田説は中村説と対立するというより、中村説を止揚するという立場で生まれたと解すべきであろう。

外国語を訳語としてとり入れるとともに、なまの形でもとり入れたことを研究した専書に、斎藤静氏『日本語に及ぼしたオランダ語

の影響』（篠崎書林、42・8）がある。副題に「語史的・文化史的研究」とあり、千足らずのオランダ語に対してそのとり入れ方を示している。たとえば、Aantrekkingskracht には「引力」、Alcoal には「アルコール（亜爾箇児）」としてそれぞれの語誌がある。私見では、訳語と原語のままとでは、語史的意義がちがうのであって、著者は「ことに近代日本語の発達という問題に関連して、その研究方法に、深い反省を促すことになるものと信ずる」と言われているが、語史としては恣意的という印象もなくはない。これに対して、なまの形ばかり取り扱ったものが外来語辞典である。楳垣実氏「外来語辞典」（東京堂、41・2）はハンディのものである。荒川惣兵衛氏「外来語辞典」（角川書店、42・9）は、鬱然たる大著である。私は本書の旧版（昭和一六）を学生時代より愛用し、原語のアイデンティフィケィションには必ず使用していた。新版は、新著と称してよいほど全面に手が加えられているが、ここにはくわしく紹介するゆとりがない。

外国資料、とくにローマ字資料は音韻研究には欠くことのできないものである。これを利用したものに連濁の研究がある。遠藤邦基氏「連濁語のゆれ」（国語国文、41・5）は、日葡辞書を中心に連濁する語、しない語のあることから、その原因を濁音に伴なう鼻音的要素の有無に求めようとしており、飛田良文氏「明治大正時代の漢語の連濁現象」（東北大日本文化研究所研究報告、41・3）は、和英語林集成を中心に連濁する語、しない語のあることについて、呉音漢音の性格を考え、消滅の傾向をさぐっている。連濁への関心は、日本人ばかりでなく外国人にもあり、古くライマン氏（B.S. Lyman）の研究が知られていた。最近では、本学会会員でもあられるが、エール大学のマーチン氏（S.E. Martin）の Morphonemics of Standard Colloquial Japanese（Language, Vol. 28, No. 3. 1952）にもくわしく論ぜられている。これからの国語学の研究は、外国人を納得させるだけのデータと論旨がなくてはならない。清濁については、ソソクなどについての菊田紀郎氏「清濁変化の一要因」（国語学研究、41・10）や川本栄一郎氏「『ささめく』の清濁と語義」（文芸研究、41・6）がある。また、青木孝氏「『吾妻鏡』寛永板本付訓清濁考――特異な読み癖を中心として――」（青山学院女子短大紀要、41・11）は、吾妻鏡に日葡辞書をつき合わせたりして、細かな調査をしたものである。注釈書などにおいて、清濁注記をするということは、一種のブームの観を呈しており、日本古典文学大系あたりが俑を作したようである。

四

近世の特殊なことばを研究した専書に、真下三郎氏『遊里語の研究』（東京堂、41・3）があり、学会を賑わわせ、書評にもめぐまれ、吉川泰雄氏（国語学、41・6）、前田金五郎氏（文学、41・8）島田勇雄氏（国語と国文学、42・2）、斯林不二彦氏（国文学攷、42・6）などがあった。就中、前田氏のものは、もっともきびしく傾聴に値する。「遊里語の高峰にアタックし、従来の登山者の辿り得ぬ所まで達したが、もう一ふんばりが必要である」と評しているが、真下氏の登頂はなおつづけられている。語彙関係のものであるが「遊里語研究、(1)粋、(2)横番、(3)心中」（近世文芸稿、41・7、42・1、8）、「女性語の系譜」（広島大文学部紀要、41・12）、『女性語辞典』（東京堂、42・2）があり、「辞典」は、女房詞、遊女語

大和言葉などから用例をとっている。女性語の文献については、島田勇雄氏「『女重宝記』の諸本について」（近代、41・10）がある。女重宝記は古書目録にもすくなく、入手しがたい。島田氏の版種研究は徹底的である。国書総目録のような便利なものが出るようになったが、本は自分で手にしないと分からないということをこの論文は教えてくれる。写本については、松井利彦氏「女中ことば集とその所収語の性格」（国語国文、41・5）がある。島田氏も推奨されているが、女重宝記の源流をさぐったものである。松井氏は一歩進んで、「女房ことばの変遷――『する〳〵』の場合――」（国語国文、42・4）を発表したが、擬態語の「する〳〵」と女房ことばとが関係するかなど、私は考えもつかないことだった。辞典と論文のちがいをこれほどよく示したものはない。ほかに、島田氏「すい言葉」（水門、42・8）がある。

近世語の研究は、口語と文語とに分けられるが、はじめに口語関係をとりあげる。一連の共通テーマをひっさげて論陣をはっているのが奥村三雄氏で、この二年間にも、「近代京阪語考――順説表現の助詞について――、同二――二段活用の残存――」（岐阜大学芸学部研究報告、41・42）、「敬語辞系譜考――近代京阪語研究の一環として――」（国語国文、41・5）、「近代京阪語の使役辞」（同、42・1）、「文末敬語系譜考」（三重県方言、41・6）がある。近世（近代）京阪語とは、近世後期上方資料としての洒落本や小咄本のことばをさしている。順接表現のサカイ、ニョッテの問題は、小林好日氏の研究よりずっと深められているし、二段活用の残存は、一段化の趨勢の中で、二段式の残存の実態を明らかにしたもので、旧説を大幅に訂正している。奥村氏の論文は、文献的精査と方言研究とが見事に融合し結実したものである。従来この種の方法で成功したのは小林氏の方言語彙の研究のみであったが、奥村氏のはよりむずかしい語法を取り扱っていて、その大成が嘱望されるのである。

待遇表現は、京阪語に対して江戸語では、池上秋彦氏「人情本の待遇表現研究・序説――梅暦ものの動詞・助動詞を中心に――」（鶴見女子大紀要、42・2）および山崎久之氏「江戸の庶民語の待遇表現の体系㈠――三馬の作品を中心として――」（群馬大教育学部紀要、41）があり、東京語までを含めて、小島俊夫氏「『アナタ』・『オ前サン』・『オ前』――一八〇九～一九〇〇年における滑稽本・人情本・言文一致小説にあらわれた待遇表現体系の変化――」（言語と文芸、41・11）がある。池上氏のは、代名詞につづいて、動詞・助動詞を使用した人物をこまかくとりあげ、山崎氏のは、男性の庶民語の対称の待遇表現体系を三馬のものから発掘したものである。ほかに、山崎氏には「言語教育・おしゃる・しゃる（助動詞「しゃる」の語史を中心として）」（語学と文学、42・8）がある。

近世の口語の中でも、俗語については、前田勇氏「近世俗語ノート（第4報）」（大阪学芸大紀要、41・2）があり、江戸語の西漸についてのべてある。竹岡正夫氏「近世語資料としての『かざし抄』中の里言」（言語と文芸、42・9）は、里言にあるめずらしい語彙を精密に考証したものしある。こういう里言研究に資するために、佐藤茂氏「あゆひ抄・かざし抄里言索引」（福井国語学グループ、41・1）が出た。里言とともに雅言も検索できるもので、私などかねがねその必要性を痛感していただけにまことにありがたい労作であった。

東国方言の資料については、深井一郎氏「『雑兵物語』の研究」

（金沢大教育学部紀要、41・12）があり、音韻・語彙・語法についてのべてある。深井氏は弘化三年版によって用語・用例総索引を作られたとのことで、その公刊が待たれる。岩波文庫本が版本よりどれだけすぐれているか不明である現在、写本より版本索引がほしいのである。雑兵物語のテクストとして、樋口秀雄氏校注『図巻雑兵物語』（人物往来社、42）がでたが、こういう史学関係のものは国語学に寄与するかどうかわからない。史学関係では雑兵のほか、三河物語や甲陽軍鑑などがでたが、同様に疑問を持っている。ほかに、武井睦雄氏「『三河物語』における連声および連声表記について」（国語研究室、41・12）がある。

方言資料については、楳垣実氏「『鳥歌話』の方言対照表」（国語学、42・6）は、京言葉と江戸語の対照表についてで、私も東条操氏のものとくらべたが、写真複製すると問題点がよくわかるはずである。鈴木勝忠氏「方言資料としての雑俳」（国語国文、42・2）があるが、鈴木氏の真価は、近刊の大著『雑俳語辞典』において問われるであろう。ほかに、篠崎久躬氏「江戸末期佐賀地方の助動詞」（国語学、42・3）がある。

方言語彙が本草学の書と関係あることについては、大田栄太郎氏のすぐれた研究などがあったが、わずらわしいためもあり最近はとだえてしまった。島田勇雄氏が孤軍奮闘している。「近世本草書における、和名と方言㈠㈡、――ボラとメナダ――、――イシモチとニベ――」（近代、42・5、12）、「近世本草書類における青魚について」（国語研究室、42・10）がある。魚名に弱い私などは、島田氏の引用される華麗な本草書に圧倒されてしまうが、こういう考証をどういう形で大成させるかなかなかむずかしいことである。

諺については、天理図書館本諺苑が戦争中公刊されたが、太田全斎自筆本たる『春風館本諺苑』（新生社、41・9）が、山田忠雄氏の企画している古辞書叢刊の第一として、頼惟勤氏解説付で出たのは慶賀にたえない。ただ、前田金五郎氏ほどの学者が「近世語雑考」（本邦辞書史論叢）の「川だちは川で果てる」の考証に、諺苑を用いず、俚言集覧によられたように、こんどは複製本なのでより一層敬遠される畏れがある。

文語では、待遇関係に、山崎久之氏「江戸前期文語の待遇表現㈠（対称代名詞）」（群馬大紀要、42）がある。『国語待遇表現体系の研究』では口語に主眼がおかれていたので、こんどは文語で、助動詞につづいて代名詞をとりあげている。大著のあとも手を休めぬ研鑽である。鈴木丹士郎氏「近世文語の問題」（専修大論集、41）、同氏「馬琴の語彙」（専修国文、42・1）は馬琴の用いた語彙のよるところを調査したもので、小説字彙あたりとの関連が闡明にされている。手間のかかる仕事ではあるが、非常に有益な仕事であり、続行してほしいものである。ほかに、下河部行輝氏「西鶴の作品における『まもなく』――西鶴文体の一要素として――」（文芸研究、42・11）、斯林不二彦氏「元禄二年頃の芭蕉の作品を支えるもの――接続助詞『て』から見る場合――」（国文学攷、41・11）などがある。吉川泰雄氏「顔回なる者」（国語研究、42・12）は、近世の漢文訓読に慣用された「なる」が、流行して文人の国文にも用いられ、拡がっていった様子が豊富な資料によって描かれている。ただ、先行論文に、春日和男氏「『なる』の意味変化――『文法上許容ニ関スル事項一六』の場合――」（語文研究、39・8）のあることに気付かれなかったのはまことに残念である。

近世の文字や仮名遣関係には注目すべきものがある。前田富祺氏「『奥の細道』の漢字」（宮城学院女子大研究論文集、41・7）は素竜本を底本として漢字の使用状況をしらべ、異なり字数一〇八一字の使用順位にまで及んでいる。近世の作品ではじめての調査である。島田勇雄氏「西鶴本のかなづかい――形容詞『――い』の表記を中心に――、㈡――ハ行四段活用動詞連用形の表記について――、㈢――ハ行四段活用動詞連用形の表記について（承前）――、㈣――諸艶大鑑について――」（神戸大文学会研究、40・3、41・3、42・1、11）は、まだつづくものであるが、㈣までで一〇〇ページ近く、しかも、この論文は従来の定説に立ち向かうという姿勢をとってきている。私がかって展望をした時、ちょうど森銑三氏の「所謂西鶴浮世草子の半数は他作なり」などのエキセントリックな提唱があり、私には分らぬまま、西鶴学者の意見を徴して、森氏に反対の考えをのべておいたようにおぼえている。島田氏は西鶴作品を六分類し、版下書きとかなづかいとの間に相関関係をみとめ、その上に立って諸艶大鑑（好色二代男）のかなづかいをしらべると、二代男の版下書きが西鶴であるという世の通説とは抵触してくるのである。さらに溯源して俳諧師としての西鶴のかなづかいは、かなりの部分を連歌師のかなづかい書にうけているようなところがあるので、かなづかい書の研究もしていて、「連歌師のかなづかひ書」（甲南大文学会論集、41・12）、「三条西実隆の仮名遣九折について」（水門、42・8）がある。島田氏が、いわゆる西鶴本の再検討のためにとられた方法や結論については、専門学者の論及をまつとして、私はこの大作業の紹介にとどまらせていただく。同じように自筆版下の基礎調査で、堀章男氏「『好色一代男』小考」（国文学攷、42・6）は、句読点による短句の調査などから、野間光辰氏などの西鶴学者に立ち向かったものであるが、私にはよく分からない。なお、これは国語学史に属するかもしれないが、筆者は「開版仮名遣書（仮）目録」（油印、41・12）を発表したところ、諸先学から注意をうけたのでやり直そうと思っている。

近世語の注釈には、前田金五郎氏には、前記論文のほか、「西鶴雑考」（言語と文芸、42・5）があり、前田勇氏「瑠璃天狗続貂㈣」（学大国文、41・12）がある。水野稔氏「『きいてあきれる』考――江戸語の発想について」（甲南大文学会論集、41・12）や野地潤家氏「『日乗上人日記』考――元禄期言語生活の一面――」（国文学攷42・6）は、国語史の分野からは遠ざかったものである。

江戸語から東京語に至るものには、田中章夫氏「江戸語・東京語における当為表現の変遷」（国語と国文学、42・4）があり、ナケレバイケナイ式の言い方の起こる前までの事情を細かいデータによって明らかにしている。鷲岡昭夫氏「江戸語・東京語における可能表現の変遷について」（言語と文芸、42・9）も精密なものである。秋永一枝氏「江戸アクセントから東京アクセントへ」（国語と国文学、42・4）は、山田美妙の辞書と古老の発音とを対比してその推移をさぐったもので、目と耳のすばらしい融合である。

五

遠くなりゆく明治についても多くの論文が見られるようになった。

待遇関係では、小松寿雄氏「『お……する』の成立」（国語と国文学、42・4）がある。オ……申ス、オ……イタス、オ……スルに推

移する状況が広範な資料によって立体的に描かれている。こういう日常語の淵源をたずねることは、現代的な意義も持ってくる。

語彙では、飛田良文氏「明治以後の語彙の変遷」（言語生活、41・11）があるにすぎない。

文章関係になると、数も多くなり、展望もやりにくい。明確な研究対象の設定しにくいことがあり、いきおい、調査のしかたやデータのだしかたがまちまちで個性的でありすぎる。

尾崎知光氏『近代文章の黎明』（42・6）は、B6版一八一ページの小冊子である。「浮雲」について、二葉亭の言語観、文章の主題・構想・叙述、文表現・文の長さ、表記符号、語句などをこまかにしらべた書である。これからは明治のものについて次第にこういう研究がふえてくると思うが、文学書とちがって、国語学の専書である以上、今までの成果がどこまでとり入れてあり、どこからが新見であることなどを明示してほしいものである。同じく「浮雲」を扱った論文に、小野基氏「言文一致文章における文末表現『〜で』について——二葉亭の場合——」（近世文芸稿、41・7）がある。尾崎氏の著では「で止め」としてのべてあるが、小野氏によれば、塩田良平氏などが早くこの用法を指摘しているようである。小野氏の「初期の近代文章における描写的文段の構造について」（国文学攷、42、6）も「浮雲」の句を重ねる言い方についてであり、「初期の近代文章に於ける文脈形成のあり方——累加的表現帯について——」（近世文芸稿、42・8）も「あひびき」などについてである。長谷川孝士氏「近代小説形成期における人物描写に関する一考察——逍遥『当世書生気質』と四迷『浮雲』との比較——」（国文学攷、42・11）も「浮雲」の表現に関係してくる。こうなると、「浮雲」についての綜合的研究が期待される。永尾章曹氏「『牛店雑談安愚楽鍋』文体について」（国文学攷、42・6）は、文章の基本的類型を求める研究で、国語史の分野には入らない。

ちがった傾向の文章研究に、鈴木英夫氏「新聞の文章の近代化——明治一二〜二〇年の朝日新聞を中心として——」（国語と国文学、42・4）がある。「見出し」のような新聞の重要な部分がどのようにして近代化して行ったかなどを調査したユニークな研究である。あとどんな問題をとりあげ、どんな風にまとめあげられるであろうか、興味深いものがある。

明治の用字研究は進藤咲子氏の独壇場である。「漢語・漢字の実態（明治）」（文学語学、41・9）、「明治初期の新聞の用字」（国立国語研究所論集、42・3）、「用字の変遷——郵便報知新聞、日本基本漢字、現代雑誌九十種を資料として——」（東京女子大論集、42・3）がある。郵便報知新聞の明治十、十一年の一年間にどのくらい漢語漢字が用いられたかについて、その量や漢字の具体的な用法を百数十ページにわたるデータによって示している。進藤氏のきめのこまかい調査によれば、約百年の用字を近代語化の過程の中でとらえると、使用度数が変わり、字音よみや訓よみが多くなり、語が交替したというよりは、増大したと思るべきものが多いのである。現代的要請から生まれた研究ではあるが、近代化とは何ぞやについて、国語史の立場からも考えさせられるものがある。明治百年と国語近代化の問題は本年に持ちこされている。

〔あとがき〕　亀井孝氏「ハワからハハへ」（言語文化、42・11）は、音韻史における回帰を論じた長編であるが、紙幅も尽きたので、後日紹介いたしたい。

—都立南多摩高校教諭—